深い学びのために

学習のポイントの解答例

1 **「悲しくのみある。」（四九・14）とあるが、かぐや姫が悲しんでいるのはなぜか、まとめてみよう。**

【答】 地上で長い年月暮らしてきたことと、地上の父母（翁・嫗）にも親しんできたことから。

▼ポイント▲　かぐや姫の言葉の中であるから、その言葉の内容をまとめることになる。月の世界と地上とが、「片時の間」（四九・11）と「あまたの年」（同・12）、「父母のこともおぼえず」（同・13）と「久しく遊び聞こえて、慣らひ奉れり」（同・13～14）のように対比されている。

2 **かぐや姫の話を聞いた翁の心情はどのようなものであったか考え、その心情を効果的に表している部分を、本文中から指摘してみよう。**

【答】 実際には「三寸ばかり」の大きさのかぐや姫を見つけたのだが、「菜種の大きさ」（四九・8）と言っているところから、たいへん小さいときから大切に育てたという、親としての愛情がうかがわれる。さらに、「まさに許さむや」（同・9）と強い言い方をしているところから、育て上げた自分たちこそが親であるという自負が感じられる。

▼ポイント▲　見つけた子を育てたのであるから、実際の親ではないことは明らかである。しかし、育て上げたことを実際の親以上に親としてふさわしいと翁は考えているのである。

言葉と表現の解答例

1 **次の傍線部「に」を、それぞれ文法的に説明してみよう。**

(1) **おのが身は、この国の人にもあらず。（四九・3）**

(2) **今は帰るべきになりにければ（四九・4～5）**

(3) **まさに許さむや。（四九・9）**

【答】 (1)　断定の助動詞「なり」の連用形　(2)　変化の結果を表す格助詞　(3)　副詞の一部

▼ポイント▲　(1)助動詞「なり」が「に」＋「あり」に分割され、間に「も」が入って強調された形。「に」の下に「あり」が出てくる場合はこのケースを考える。(2)「～になる」という変化の結果を表す格助詞。下に「なる」という動詞がある場合はこれを考えてみる。(3)「まさに」という副詞の一部。

言語活動の解答例

1 **かぐや姫が、「この国」を去るのを嘆き悲しむのはなぜ**

か。その理由を考え、話し合ってみよう。

【答】かぐや姫はこの国で長く暮らすうちに、月の都の両親のことも思い出さず、この国に慣れ親しんだ。後に残す養い親たちの悲嘆を考えると悲しみを抑えられないため。

▼ポイント▲　本文の「かの国の父母のこともおぼえず、ここには、かく久しく遊び聞こえて、慣らひ奉れり。いみじからむ心地もせず、悲しくのみある」（四九・13）や、「さらず、まかりぬべければ、おぼし嘆かむが悲しきことを、この春より、思ひ嘆き侍るなり。」（四九・6〜7）が直接の根拠となる箇所。「片時の間とて、かの国よりまうで来しかども、かく、この国にはあまたの年を経るになむありける。」（四九・11〜12）とあるように、月の世界ではわずかな時間でも、地上では人々と慣れ親しむ十分な時間を過ごしている。時間の経過の差に関しては、浦島伝説なども想起される。かぐや姫は地上で過ごした長い時間の中で人間的に豊かな心情を持つようになり、育ての親との関係性も深まったと予想される。

（植田　敦子）